人権尊重の会だより

第24号
令和5年（2023年）3月8日

津山市人権教育啓発活動シンボルマーク

津山市人権尊重都市宣言

- 人間の自由と平等の精神に基づき、信頼しあい住みよい都市をつくろう
- 人権を尊重し差別をなくそう

『コロナ禍の中で』

ひまわりの種まき（高田小学校）

❷～❸ **特集：高田小学校出前授業　みんなちがって みんないい**

❹～❺ **今、人権尊重の会では…**
- 人権を考える市民のつどいに参加して
- 視察研修に参加して
- さんさん祭りを終えて

❻～❼ **関連団体の活動・行事**
- 津山市保幼こ小中人権教育研究協議会活動報告
- 津山っ子を守り育てる市民の会の活動
- 公民館紹介（二宮公民館）
- 子ども会連合会の活動について

❽
- 人権啓発視聴覚教材・出前講座のご案内
- 津山市児童・生徒ポスター最優秀作品
- ひと・ふれあいメッセージ2022
- 編集後記

咲いたひまわり

小さなありがとう

佐良山小学校　6年　小玉（こだま）　季穂（きほ）

やさしくしたとき
やさしくされたとき
小さなありがとうが生まれる

何かをわたしたとき
何かをわたされたとき
小さなありがとうが生まれる

思いを伝えたとき
思いを伝えられたとき
小さなありがとうが生まれる

今まで過ごした小学校に
これから過ごす中学校に
大きなありがとうが生まれる

ハンセン病の学習をして

津山東中学校　2年　佐藤（さとう）　来樹（らいき）

十一月二十五日、ハンセン病の学習をするために、長島愛生園に行った。ハンセン病の患者の方々は、かつていろいろな差別や偏見を受けていた。入院していた患者の中には、差別されないこの施設に来てよかったと話していた方がいた。小さいとき、お母さんに旅行に行こうと言われ、来たところが長島愛生園だったという方もいた。この学習を通して、自分にできることはないかと考えた。それは、正しい知識を身につけ、知り合いや友人に伝えることだと思った。「ハンセン病は、治る病気だからこわくないよ。」と声をかけ続けたら何か変わっていくかもしれない。

差別や偏見をなくすには、正しい知識を身につけ、それをしっかり伝えていくことが大切だと思った。

特集

高田小学校出前授業
～みんなちがって　みんないい～

令和4年度は、コロナウイルスの感染拡大による行動制限、ロシアによるウクライナ侵攻、円安の影響での物価高など、人権課題の多い年でしたが、人権尊重の教育推進協議会としては、3年ぶりの県外視察研修、さんさん祭りの実施など、徐々に以前の活動に戻すことができた年となりました。

また、高田小学校の皆様のご協力で、須田・小椋両委員による出前授業を行うことができたのは大きな成果でした。

10月24日、高田小学校6年生と共に「ちがい」について考えるために、本会員6名と人権擁護委員6名が参加して人権授業を行いました。

授業のねらい

高田小学校6年生という、同じ場所で学び生活する仲間たちは、同じ立場や価値観を持っている反面、異なることが多くあることを知る。またそのことで争いやいじめなどの引き金にもなっていることを知る。だが、皆があらゆる場面で同じであると想像してみると、おもしろくない。皆が全て違いがあるからこそ、トラブルもあるが、それを乗り越えることで成長していける自信を持つ。

授業の流れ

授業実践者（以後T）　始めましょう。

児童（以後C）：お願いします。

T　一週間前に書いてもらったアンケート結果を紹介します。その前に、まず、金子みすゞさんの詩「私と小鳥と鈴と」を読みましょう。参観者を含めてみんなで読みましょう。

T　感想はありませんか。

C　みんながちがっていいよと、言っている。

T　ちがえばいいの。

C　いいところもちがう。悪いところもちがう。

C　私と小鳥はちがう。それでいいということ。

T　ちがいはあたりまえ。おかしいですか。

C　おかしくありません。

C　人間は小鳥や鈴とはちがう。ちがいがあってもいい。

T　みんなちがうということが、アンケートでもわかりました。アンケートを紹介します。

●わたしは天才　●わたしはお父さんの子　●わたしはお母さんの子　●先生が好き　●トマトが好き　●虫がきらい　●犬がきらい　●やさしい子です　●光の速度で走れる　●暴力がきらい　●ピアノが得意　●きらいな人がいる　●日本の平和が好き　●ウクライナが好き、ロシアも好き　●しゃべることが苦手　などなど。

「ぼくもそう思う」「これは誰々ちゃんが書いた」「これは誰々ちゃんのことじゃ」などなど打ち解ける。

T　ところで、いじめ、いじり、シカトなどがみんなの中でありましたか？

C　（児童がうなずく）

T　なぜ、おきたか？

C　いじめは世界中である。

T　いじめられたらどんな気がする？

C　いじられたら悲しいし、不登校になる。

T　では、なぜ、そうなるのかな？

C　ちがうところがあるから。

T　人間は、なぜ、いじめをするのかな？

C　人間にも好き嫌いがある。

T　いじめをどうのりこえるか、いじめられたらどうすればよいか、考えていこう。担任の先生どうですか？

担任　先生の気の付かないところで、つらいことがあったんだね。反省しています。

T　「人権の絵本」の中の「ちがいの豊かさ」を紹介し、読み聞かせる。みんな同じなら…私はないのも同じ、などなど。最後に、金子みすゞの詩に帰ったようだと話す。

C　一同拍手。

授業の感想（抜粋）

●人間全員全てが同じだったらめちゃくちゃこわいから、みんなちがったほうが良いと思った。みんな生きているので、仲良くしたいです。自分にもだめなことがたくさんあるけど、あたりまえなので、だいじょうぶ。

●みんな、考え方・性格・体質などが同じだったら、おもしろくないけど、みんな違うから笑ったり、怒ったり、泣いたりして生活をして、いろんな思い出ができることがわかった。

●いろいろな人がいるから、意見や主張が成り立っている。だからみんなちがってみんないい。

●みんなそれぞれ性格・思いがちがったり同じだったりしたことが分かりました。ひとりひとりがどう思っているのかを、今度は、考えながらお話をしたいです。

●絵本のさし絵で、見た目も、性格も、声も、名前も、手も足も全て同じだと、ないのと同じ。というところで「確かに」と、感じたけど、今、私が思ったことも、人それぞれちがうんだろうなと思った。いじめやいじり、シカトなどふざけてやってしまった面はあるけど、これからは絶対にそんなことをしないようにしたいです。

●みんな同じだと勝負をするとき面白くないなと思った。みんな違うことは当たり前だけど、自分だけ持っている「いいとこ」があったら目立てるから良い。自分にもいいところはある。

●みんなとちがうことは、悪いことじゃない。でも、いいことばかりでもない。みんなわかり合うことが大切。自分の良いところ悪いところをわかる。相手の良いところ悪いところをわかる。相手の悪いところを受け入れる。相手の良いところをまねする。相手の悪いところが直せるように支えてあげる。チャレンジする。

●話を聞いて、人はみんなそれぞれちがうからこそ、すばらしいということをくわしく知ることができて、とてもいい時間をすごすことができたと思っている。楽しかった。

授業実践者の感想

授業実践にあたり、この授業を受け入れていただいた高田小学校の校長先生・担任の近藤先生、6年生のみなさんに感謝します。大変お世話になりました。この授業を通して児童は同じものもありながら、違いを認めて学級目標の一人ひとりが輝く「カラフル」な世界が生まれてくることをつかんだと思います。6年生の仲間集団の互いを支え合う気持ちの力強さに驚きました。いつまでも続くと信じます。

今、人権尊重の会では…

人権を考える市民のつどいに参加して
ニライカナイで逢いましょう
～ひめゆり学徒隊秘抄録～を拝聴して

北部地区民生児童委員　杉浦千恵子

落語家の桂春蝶さんが、どうして話芸で戦争という題材を取り扱うようになったか、その契機となった春蝶さんの生いたちや経歴から話が始まりました。ご自身の父親や芸人仲間の死と関わり、死生観の種を植え付けられその種が芽吹いて花が咲く瞬間があったと。

鹿児島の知覧特攻会館には、たくさんの遺品があり、特攻隊員の思いに触れ、自分の死生観の解釈が変わっていったそうです。生きる意味を再考していくことを人々に届けたい。戦争は最大の人権侵害のひとつである。戦争の時代を生きた人が何をどう考えたのかを伝えたいと話されました。春蝶さんは舞台に用意された高座に座り、会場の照明が消え、命の落語が始まりました。

場面は戦時中のガマ（沖縄の洞窟）の中です。ひめゆり学徒隊のよう子先生が、「今なら言える。伝えなければならない血の島と化した沖縄戦の話を。」と語り始めました。死体や手足のない人を見ても何も感じなくなった少女に、「凍った心は平和になれば解けて元に戻ります。平和な未来の夢を話しましょう。」と続けます。

次の場面は、知覧の松田航空長の話です。松田さんは、アメリカ軍の捕虜となり、帰還した少年兵からの機密情報を上申しますが、却下されます。失意の松田さんは、「この戦争は敗戦という形で終わるが、負けて救われることもある。再生のきっかけとなる！」と伝え出撃していきます。松田さんが沖縄上空に来たとき、少女たちを救うためガマから出てきたよう子先生の姿を見つけます。「生きて帰ってくれ。命は自分のものだけではない。命は未来の誰かのためのものだ！」と。よう子先生は、夫の松田さんの言葉に勇気をもらい、鉄の暴風雨の中生きのびることができました。

会場に照明がついたとき、誰の目にも涙が光っていました。

『さんさん祭り2022』を終えて

実行委員長　黒見　節子

今年度の「さんさん祭り2022」は、7月9日・10日の2日間、アルネ・津山の4階・5階で開催し、2019年12月以降、コロナ感染拡大で実に3年ぶりでした。実行委員会も少人数で、感染症の影響を感じましたが、テーマは「～明日へ！つながるわたしたち～」、コロナで集まりにくくなった中、「つながりたい」との思いをこめたテーマだと思いました。

体験コーナーは「心のいやしと脳トレ　臨床美術」「七夕に願いを」「アロマ発泡　バスボム作り」、学習会は「切り絵アートにチャレンジ」「だれでも簡単、手軽に！アイスコーヒーのいれかたセミナー（初級）」「私のやれてないこと、いっぱい！―男女共同参画の始まり、今、これから―」、そして、「まちかど悩みごと　無料相談」でした。学習会も展示も、参加者名と連絡方法の記入、マスク着用や手指の消毒などコロナ対応をしました。展示は14団体の日常の活動報告に加え、学

視察研修に参加して

『人と防災未来センター』を訪れて

高野公民館長　永禮　茂

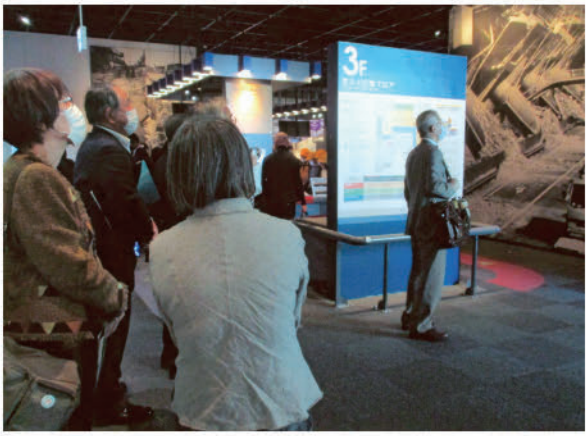
27年前の1995（平成7）年1月17日午前5時46分、ドンと突き上げる激しい衝撃で目が覚めた。家族の無事と家財の被害がないことを確認して、テレビをつけた。そこに映し出されたのは…。

マグニチュード7．3の阪神・淡路大震災が発生。死者・行方不明者は6，400人を超え、約63万棟にのぼる住宅が全半壊した。津山でも震度4を観測した。

我々「津山市人権尊重の会」の16名が人と防災未来センターを訪ねたのは、秋晴れの10月28日だった。センターに着いて驚いたのは、兵庫県内外から、大勢の小中高校生が社会見学や修学旅行で訪れていたことだ。入館しエレベーターで4階の震災追体験フロアへ。「5：46の衝撃」という映像で、大震災の地震破壊のすさまじさを大型映像と音響で体感した。わずか7分間だったが、映し出された映像に目を伏せたり、大きな音響に耳をふさいだりする小学生がたくさんいた。

視聴後、震災直後のまち並みをジオラマ模型で再現した通路を通り、大震災ホールへ。ここでは、復興に至るまでのまちと人を紹介した「このまちと生きる」が上映されていた。

3階は震災の記憶フロア。震災関係資料を映像や模型で紹介している。館内の各場所にボランティアがいて展示の解説や説明をしていた。また、自らの震災体験を語る、『語り部』の話に聞き入る子どもたちの姿が印象的であった。いかに甚大な被害を及ぼした大震災でさえ、時間の経過とともに記憶は薄れ忘れ去られていく。特に実体験していない者にとってはよりそうかもしれない。そのためにもこのセンターのもつ意義や役割がいかに大切で貴重であるかを確信した。



連絡通路を渡り東館へ。3階は2021年にリニューアルオープンしたサイエンスフィールドである。地震をはじめ地球上で起こる自然現象のメカニズムや、自然災害との関わりや結びつきを学習できるスペースである。特に「ハザードVRポート」での、VR映像と音声による地震・津波・風水害の現場体験は圧巻であった。

最後にこころのシアターで、災害に遭遇した時、自分の命をいかにして守るのかを問いかける映像を観てセンターを後にした。

被災から27年経った今、「自助・共助・公助」により、阪神・淡路地域は見違えるほどの復興復旧を遂げ、被災の跡形も見えなくなった。「天災は忘れた頃にやって来る」と言われるが、毎年のように自然災害が発生し、そのたびに大きな被害が出ている。「ここは大丈夫」「自分は大丈夫」という根拠のない慢心や思い込みが命を失うことにつながる。センターでの映像の一部に、災害に遭った時一番にすることは『逃げる』とあった。何よりも尊いたった一つの『命』を守ることを最優先しなければならない。

初めて参加した視察研修だったが、参加者同士の交流もでき、他の視察地での研修も有意義であった。

習会「切絵アート」の参加者の作品を即時に展示。スタッフ、事務局の皆様など多くの方に感謝しながら、平安、安心に暮らしていくとは？と考えさせられた祭りでした。

人権尊重の会は人権七夕として「七夕に願いを」で参加しました。

多くの親子が足を止めて短冊に願いを書いていました。

関連団体の活動・行事

津山市保幼こ小中人権教育研究協議会 活動報告

事務局長　平井　康範

※津山市内の保育園（所）・幼稚園・こども園・小学校・中学校の教職員をもって組織する会

津山市保幼こ小中人権教育研究協議会は、津山市内の保育園（所）・幼稚園・こども園・小学校・中学校の人権教育の推進をはかることを目的にして、人権教育に関わる実践と課題を出し合い、研究協議を積み重ねています。

今年度も新型コロナ対策のため、夏に開催予定であった夏期研修会を中止にしました。優れた人権教育の実践交流の場として位置づけていたため、3年連続で中止になり非常に残念でした。報告予定であった実践報告は、要約して「市人研のあゆみ」に掲載することにしました。

このような状況の中、10月7日に感染予防に留意して第2回幹事会を開催しました。幹事会終了後は、教材研究部の研修会として人権教育講演会を行いました。

講師は、昨年度と同じくNPO法人レインボーハートｏｋｉｎａｗａの理事長であり、津山市出身の竹内清文さんで、演題は「ＬＧＢＴＱ・性の多様性～当事者体験談や保護者との関係を中心に～」でした。ＬＧＢＴの後のＱはどのカテゴリーに入るか分からないことを指しています。

竹内さんのお話では、オリンピック憲章には、人種・肌の色・性別・性的指向・言語…、いかなる種類の差別も受けないとあること、ダイバーシティ（性的多様性）が重視されていて、Ｇｏｏｇｌｅ社では、誰がチームのメンバーであるかよりも、チームがどのように協力しているかが大切であること、また、チームの効果性に最も影響を与えるものは心理的安全性であるとのことでした。

文部科学省の生徒指導提要の改訂の中で、性的少数者の児童生徒に対する対応について書かれていること、ＬＧＢＴの現状データや、学校で広がる取り組みについても具体的なお話がありました。

岡山県内だけでもたくさんの学校で講演されている竹内さんのお話から、様々な示唆をいただきました。

津山市子ども会連合会

会長　岡田　進

インターネットや携帯電話などのコミュニケーションツールが普及し、私たちの暮らしの中に急速に広がり、人と人とのコミュニケーションが時間や場所を選ばなくても容易にできるようになりました。また、たくさんの情報を、家庭にいながらにして得ることができるようになりました。

こうしたことを背景に、本格的な少子高齢化社会が進み、多くの子どもたちは物質的に豊かになっている反面、年齢・学校・地域を越えた子ども同士の交流や自然とふれあう機会が少なくなってきており、社会性や自立心、さらに連帯感の低下を招いたようです。

子ども会は、社会の変化とともにその姿を変えて、子ども会の趣旨（子どもが地域に集い、考え、遊び、学ぶ活動）が、子どもにとって必要不可欠となり、子どもの健やかな成長を願い、子ども会の育成・指導にあたる役員は、子ども会の原点に返って、「子どもの手による子どものための子ども会」を目指してがんばっています。

地域で子どもを育てるという社会的課題、子ども会だけで解決すればよいものということではありません。地域が、あるいは各種団体が一緒に手を携えて、豊かな社会の担い手としての子どもたちと今後どのように関わっていくかが重要な問題となっております。その大変な、しかしやりがいのある子ども会活動をみんなで一緒に行っています。

津山っ子を守り育てる市民の会

「津山っ子こころのふれあいトーク」について

会長　西尾　保

津山っ子を守り育てる市民の会は、次代を担う津山の子どもたちが心豊かで健やかに成長することを願い、地域の青少年健全育成会が中心となって、地域が一体となった青少年健全育成活動を推進するため、育成会相互の連携と活動の充実、育成会と青少年健全育成関係団体、個人と相互連携を図ることを目的としています。

当会は、中学校単位でブロックを分けており、各地域において健全育成に取り組む事業をはじめ、研修会を開催し学校や関係機関と相互の情報交換等の活動を進めています。

12月3日土曜日に、「津山っ子こころのふれあいトーク」をグリーンヒルズ津山リージョンセンター・ペンタホールにおいて開催しました。

これは津山市内の9中学校（岡山県立津山中学校を含む）から、2名ずつ代表を選出してもらい、中学生の皆さんの現在の思いや、SNSでのいじめに関すること、スマートフォンのネット被害等、また高校や大学への進学や就職に関係すること等について、考えていることを自由なテーマで発表してもらう場です。会場に参集された参加者の皆様方から、発表した内容への意見、感想、質問を受け、発表する中学生と会場参加者の、双方向的なトークをする発表会です。中学生の皆さんの考えていること、その思いを共有することで、当会の参加者も今後青少年育成の一助となることを期待し、楽しみにしている会です。

今年度は3年ぶりに中学生の皆さんを招いて、約100名での開催となり、発表テーマも、「LGBTQ」、「戦争」、「家庭」、「部活動」から感じたこと等、様々なテーマの発表でした。中には大人に対して厳しい意見を求められ、大人たちが苦労する場面もありました。

中学生の発表に対し、老人へ向けた思いをどう伝えていくか、将来の目標は何か等の質問や、発表内容が素晴らしく勉強になった等の意見もあり、和やかな雰囲気の中、とても有意義な時間を過ごすことができたと大変好評でした。

つなぎ繋（つな）がる公民館

二宮公民館　館長　柿本　裕

二宮公民館はつやま西幼稚園に並設された県北初の複合施設として、令和元年8月に開館しました。研修室・会議室・和室・調理室があり、ヒノキなどの県産材が多く使われた木の温（ぬく）もりが感じられる建物です。

「なにしてるの？」と、園庭にある防災畑で作業をしていると、一人二人と笑顔の園児が寄ってきて色々と話をしてくれます。これはつやま西幼稚園から、老人クラブや公民館地域の人が、七夕やお月見会に招かれ、歌や体操で遊び、世代間交流で顔見知りになったからだと思います。

また、連合町内会との合同事業は活発です。公共交通の試乗体験や季節を楽しむコンサート、また、寄せ植え教室やウオーキングなどは毎回好評で、たくさんの方に参加いただいています。公民館がその地域の活動拠点として気軽に集まれる心地よい所であって欲しいです。

現在、子どもたちから高齢者、男性女性など多くの方々が参加する33の団体が、運動・パソコン・文化活動などの習い事に励み、月間900人前後の方が利用しています。主催講座は、園児を対象に字を書くことが好きになるよう練習している「かき方教室」と、身近な話題について見学体験し、日常の暮らしに役立てる「公民館・新暮らしの学習講座」を開講しています。

新型コロナは、多くの人に考え方や行動で変化をもたらしましたが、利用者の方は新しい生活様式の中、人との距離や時間を上手にコントロールしながら、体を動かし気の合う仲間を作り生涯学習に弾みをつけているように感じます。これからも公民館がそういう生き甲斐（がい）づくりの場所になれるよう活動のお手伝いをしていきたいと考えます。

人権尊重の会だより　第24号

人権啓発視聴覚教材・出前講座のご案内

「人権」をわかりやすく学ぶことができるビデオテープ・DVDを用意しています。個人・企業・学校・団体のご利用をお待ちしています。予約やお問い合わせは、津山市人権啓発課（アルネ・津山5階「さん・さん」内）に。
「人権啓発視聴覚教材（VHS、DVD）一覧」は市内公民館にも備えています。
津山市ホームページにも掲載しています。「人権出前講座」もご利用ください。

本年度購入のDVD

- 「きこえない人の生活・気持ち」
  聴覚に障がいを持つ方々の話を通じて、私たちにできる配慮を考えてゆく作品
- 「インターネットと個人情報」
  インターネットを安全に使うにはどうすればいいのか考える、中高生向けの作品
- 「バースデイ」
  性の多様性を認め合い、誰もが自分らしく生きられる社会を目指す作品

津山市人権啓発課（アルネ・津山5階「さん・さん」内）TEL.0868-31-0088　FAX.0868-31-2534

第74回人権週間 津山市児童・生徒ポスター 最優秀作品

令和4年度も人権について考えることを目的に、津山市内の小中学生が人権に関する「ポスター」「メッセージ」づくりに取り組みました。ポスターは2,408作品、メッセージは3,199作品（一般を含む）の応募がありました。いずれも豊かな感性で、人への思いやり、感謝の気持ち、いじめ防止など作者の思いが伝わる作品がそろいました。第74回人権週間に合わせて行われた「人権を考える市民のつどい（11月28日）」で表彰された優秀作品の一部を紹介します。

また、12月3日から12日まで津山市立図書館前ギャラリーでも展示されました。

《小学校低学年の部》
西小学校　1年　宮脇（みやわき）　唯（ゆい）

《小学校中学年の部》
新野小学校　4年　久本（ひさもと）　悠智（ゆうと）

《小学校高学年の部》
河辺小学校　5年　宿野（しゅくの）　心奏（ここな）

《中学校の部》
北陵中学校　2年　正木（まさき）　優奈（ゆな）

ひと・ふれあい メッセージ2022

【最優秀賞】

《小学生の部》
いじめ見て　考えないで　まず止めて
鶴山小学校　4年　上市（うえいち）　翔貴（しょうき）

《中学生の部》
きれいだね　それぞれの個性　十人十色
北陵中学校　1年　清水（しみず）　杏奈（あんな）

《一般の部》
多様性　認める心と　尊重を
市内在住　尾埜（おざと）　邦明（くにあき）

【優秀賞】

《小学生の部》
ごめんなさい　ゆうきをだして　じぶんから
中正小学校　1年　中西（なかにし）　冠仁（かんじ）

まわりを見て　あなたのそばに　友がいる
東小学校　2年　鈴木（すずき）　茉音（まお）

やめようよ　その一言で　きずつくよ
一宮小学校　3年　十亀（そがめ）　渚（なぎさ）

ゆるせない　いじめてわらう　いじめっ子
鶴山小学校　4年　澤村（さわむら）　伊吹（いぶき）

言葉もね　暴力なんだよ　心刺す
一宮小学校　5年　有岡（ありおか）　千景（ちかげ）

思いやり　「もらう」じゃなくて　「自分から」
東小学校　6年　田原（たはら）　作楽（さくら）

《中学生の部》
出会いとは　きせきのなかの　ひとしずく
北陵中学校　3年　遠山（とおやま）　愛果（かなか）

《一般の部》
気を付けよう　差別と区別は　紙一重
市内在住　日下（くさか）　聡（さとし）

編集後記

コロナウイルス変異株、ロシア・ウクライナの戦火拡大、世界各地の異常気象・自然災害、諸物価値上がり。暗いニュースが世界を覆いつくしている。とりわけ戦争が如何に人権を踏みにじるものであるか目の当たりにして言葉を失う。

しかし、みんなで知恵を出し合い、協力して従来の活動が少しずつ復活しつつある。

今回の紙面はそのことが実感できる。生活者の視点に立ち、子どもたちの未来に繋がる人権意識の向上のために多くの市民に届けたい。

【編集委員】
須田　京祐　楽万　真一　小原　龍二
小椋　英子　岡本　輝昭　髙山　康晴
椋代　孝　渡部　明子　田口慎一郎
安藤みさ子　二木　幸子　安東　正人
井上　郁子　青木　幹生　古金三友紀

《発行日》令和5年3月8日《編集・発行》津山市人権尊重の教育推進協議会　〒708-8520　津山市新魚町17番地　アルネ・津山5階
津山市総務部　人権啓発課　人権係内　TEL（0868）31-0088　FAX（0868）31-2534